

# オーストラリア英語の二重母音シフト

〔調査報告〕

沼 野 治 郎

## はじめに

日頃英語教師として耳を慣らすためと世界のニュースをいち早く知るために、海外の英語放送を聞くように努めているが、住む場所や放送する側の電波の出力、方向の変更などにより、受信できる放送は一定しない。今の下松市花岡に移ってから、米軍の極東放送（FEN）は入らなくなり、ラジオオーストラリアが入るようになった。ニュースや他の番組を聞くうちに、よく知られている day が die に聞こえるオーストラリア英語の発音の特徴に注目し、2年前の秋からメモし始めた。そして、そのように発音するとき、オーストラリア人の中で混乱が生じないのだろうか、という疑問が生じた。

そこで海外から日本に招聘される英語教師（Assistant English Teacher）の中に、オーストラリアからの人も72名に達する（1987年秋）のを知って、彼らを informant として面談する計画を立てた。しかし国内を各地に旅行して彼らの英語を採取するのも、思い切って訪豪するのも、安い便を使えばそれほど差がないことに気づいて、オーストラリアに向かうことにした。また日本に来て英語を教えている AET たちは、豪英語の特徴を抑えて応待することも十分あり得ることであった。

1988年8月3日から12日まで、シドニー4日、キャンベラ3日、メルボルン3日の正味10日間の短い滞在であった<sup>1)</sup>が、自分の耳とテープで豪英語を

---

注1) 短いとはいえ、あとの方になると、耳が慣れて、オーストラリア英語の発音の  
(次頁脚注へ続く)

観察し、オーストラリアの言語学者たちから、主題の件について意見を聞くことができた。

当初 day [dɛɪ] が [dʌɪ] に聞こえる特徴を観察することを念頭において出かけたが、結局対象が拡大し、下記のように豪英語の二重母音シフトのほとんどを観察調査することができた。

### 3種のオーストラリア英語

オーストラリア英語は、国土が広大であるにもかかわらず、米国と違って地域的方言はなく、著しく均等質であることが、大きな特徴であると指摘されている<sup>2)</sup>。そして、地域的方言はないかわりに、3種の社会的方言の存在が学者たちの間で一般に認められている。それは、Cultivated Australian English (教養あるオーストラリア英語)、General Australian English (一般的オーストラリア英語)、Broad Australian English (なまりの強いオーストラリア英語)の3つである。この区分と名称は、1965年の Mitchell & Delbridge, *The speech of Australian adolescents: A survey* に始まっている。その後幾分修正や拡大した区分あるいは名称も行われているが、この3種に分けることが定着している。

オーストラリアの場合、社会的方言といっても、厳格な社会階層の区分があるわけではなく、同じような環境、教育の下にあっても個人差が生じる余地がある。そこで上記の区分は、特定の個人が FLEECE, FACE, PRICE,

---

特徴が不自然でないように聞こえ始め、自分もそのような発音で話しかねない状態であった。それでオーストラリア英語を研究する人は、時々オーストラリアを離れる必要を感じている。(例、オーストラリア国立大学の 大朝寛明氏。1988年 8月8日、筆者との会談で。)

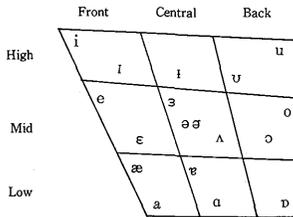
2) Ramson, W. S., *Distinctive Features of Australian English* in Turner, G. W. ed. *Good Australian English and Good New Zealand English*, Reed Education, 1972, pp. 36-38. もっともオーストラリア国立大学で博士課程にある大朝寛明によれば、アデレードとメルボルン以東の人々の間に差異があるという。大朝, *Regional Variations in Australian English*, 1980, M. A. Thesis.

GOOSE, GOAT, MOUTH の母音をどのように発音するかによって行われる<sup>3)</sup>。

3種のオーストラリア英語の発音

		Cultivated	General	Broad
/i:/	FLEECE	[i]	[i]	[ə:ɪ]
/ʌɪ/	FACE	[ɛɪ]	[ʌɪ]	[ʌ:ɪ, a-:ɪ]
/aɪ/	PRICE	[a-ɪ]	[ɔɪ]	[ɔ:ɪ]
/u:/	GOOSE	[u]	[ɪu, ʊu]	[ə:u]
/ʌʊ/	GOAT	[öʊ]	[ʌu]	[ʌ:ʊ, a-:u]
/æʊ/	MOUTH	[a-ʊ]	[æo]	[ɛ:o, ɛ:ʔ]

付。舌の位置による母音図



資 料

オーストラリア英語の採取に当たっては、mail など [ɛɪ] の音を含んだ語と mile のように [aɪ] を含んだ語が近接して並んだ英文のリストを用意し (Appendix 参照), これを読んでもらって録音する方法と, 相手に気づかれないで会話を録音する方法をとった。ほかにラジオ, テレビの放送も録音した。また録音できなくても, ノートに記録したものも数多くある。以下 Gen Aus E, Broad Aus E を話す人の発音の観察例をあげる。

オーストラリア英語の二重母音シフト<sup>4)</sup>

i) [ɛɪ] → [ʌɪ] (日本人の耳にはエイ→アイに聞こえる。)

顕著な例: way, away, OK, day, today, Sunday, eight, eighty, eighteen,

3) Wells, J. C., *Accents of English 3 Beyond the British Isles*. Cambridge University Press. 1982. p. 597. 次の表も。

4) *Ibid.*, pp. 256, 594 の Diphthong shift を邦訳したものだ。

name, wait, take, space, late(r), change, paper, station, location, preparation, Australian など。

この二重母音シフトが最もよく目立つオーストラリア英語の特徴で、Broad Aus E はもちろん Gen Aus E でもこの [ɔɪ] の発音が大変優勢である。ラジオ、テレビのアナウンサーが話す Cult Aus E でも、[ɔɪ] に近い発音がしばしば聞かれる。例えば、Sunday の day のところ、way, anyway などが他の語では [eɪ] といっているのに [ɔɪ] と聞こえることがある。

文や回答の例では、シドニーの鉄道の切符売場で “Your name [nɔɪm]?” と聞かれて、訪豪初日だったため、慣れず name と気づかなかった。それで相手に2回繰り返させてしまった。シドニー、キャンベラ間の列車で “Take [tɔɪk] the seat” と車内アナウンスがあり、メルボルンで女子学生が、 “It’s really strange [strɔɪndʒ].” という具合である。またバスで一緒になったメルボルン大学の男子学生から tape を持って来たかと聞かれたのが type を持って来たかと聞こえたことであった。(この頃はもう何を言っているのかかなりわかりかけていたが。)そして帰りの日シドニーで老婦人から “Have a safe [sɔɪf] trip home.” と挨拶されたのであった。

単語の綴り、音節数、アクセントの位置は関係がなさそうである。このシフトが起こるのは、綴りでは [eɪ] と発音する long a が大部分であるが、eight, weight, vein, great, remain, obey などの場合も [ɔɪ] と発音されている。ただ、past を [pɔɪst] というのを聞いたことから、a の文字を [ɔɪ] という傾向が強いを感じた。音節の数も関係がない。アクセントはそこにおかれている場合が多いが、participate, decade, yesterday などアクセントがかからない場合もこの母音シフトが起きている。

ii) [aɪ] → [ɔɪ] (日本人の耳にはアイ→アアイに聞こえる。)

顕著な例 : lie, line, like, licence, nice, night, right, style, time, side, size, find, sign, decide, climb, I, eye, exciting, device, deny など。

[eɪ] → [ɔɪ] のシフトがある時、die や mile など [aɪ] の二重母音を持

つ語が、オーストラリアなまりのある人によってどのように発音されるのかが、大変興味のある所であった。day と die, mail と mile の発音が同じとわかないまでも、似たものになって混同が生じないかと思われたからであった。

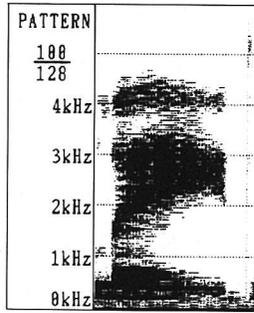
結局上記のように、後部円唇低母音 (low back rounded vowel) の基本<sup>カーディ</sup>母音<sup>ナル</sup>13  $v$  から  $i$  に移る二重母音で発音し、近接を避けている。訪豪の初日シドニーのオペラハウスで駐車係の中年の男性に英文サンプルを読んでもらったら、*lied* が人名の *Lloyd* [lɔɪd] に聞こえて驚いたことを鮮明に記憶している。実際には [ɔi] ではなく [ɔɪ] と発音しているのであるが、円唇化のため日本人の耳にはオの音が混ざっているか、初めの部分に入っているように聞こえる。

That's right. The other side. は最後の語がそれぞれ片仮名で書けば、ロアイト、ソアイドのように聞こえる。そして [ɔ:i] のように伸ばして発音する傾向が見られた。例, *night*, ノアイト, *side*, ソアイトなど。

iii) [ɔv] → [ʌʌ, əv, əv] (日本人の耳にはオウ→<sup>(イ)</sup>オウ, アウ, オ<sup>(イ)</sup>ウに聞こえる。)

顕著な例 : *go(ing)*, *no*, *so*, *home*, *hope*, *moment*, *most*, *whole*, *cold*, *smoking*, *motel*, *grow*, *Coke*, *row* など。

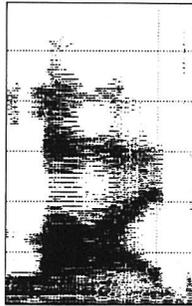
3番目に気づいた顕著な二重母音シフトは、私にとって予期しないものであったが、[ɔv] が2, 3通りの発音にシフトしていることであった。1, 2例をあげれば、15歳のときチェコスロバキアから移民してほとんど Australian accent のない30代の女性が *I hope so.* といったとき、*hope* を [hɔɐp] (ヒョープ, ホョープに聞こえる) と発音していた。キャンベラの女性議員からも同様の発音が聞かれた。他に、*Thank you so much.* の *so much* が [səv] *much*, *no* が [nʌʌ] (ナウ, ナオ) に聞こえ、*cold* が [kəuld] (カウuld) と発音される例を耳にした。(8月上旬シドニーは温暖であったのに比べ、キャンベラはかなり寒かった。) また *most of the time* の *most*, 他に *home*, *Coke* にも上記の *hope* と同様の発音が聞かれた。帰りの飛行機



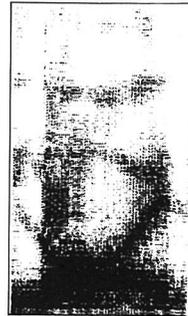
米 laid [ləɪd]



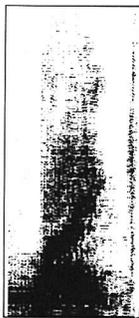
豪 laid [lɑɪd]



米 lied [laɪd]



豪 lied [lɔɪd]



豪 lake [lɑɪk]



豪 like [lɔɪk]

図 1 音声分析図 (spectrogram 声紋) による  
[ɛɪ]/[ɑɪ], [ɪɪ]/[ɔɪ] の相違

で、トラックやバスの運転手を15, 6年してきた男性が、Cokeを [kœuk] (コョーク, キョオウク) というのでスチュワーデスが1, 2度聞き返していた。

iv) [aʊ] → [æʊ] (日本人の耳にはアウ→エアウに聞こえる。)

顕著な例：count(er), account(able), house, now, about, around, down など。

このシフトはそれほど広く聞かれなかった。アメリカの西部など一部で聞かれているのを知っていたが、オーストラリアでも多少耳にした。一例をあげれば、シドニータワーをロッククライミングの要領で頂上まで登った青年が、テレビの特集番組の中で、「時は今だ。今やろう。」というとき、nowを2度強調して、[næʊ]と発音していた。

v) [i:] → [ɪ, ə(:)ɪ] (日本人の耳にはイー→エイ, アイに聞こえる。)

顕著な例：see, street, secret, keen, D, people, week, cheap, sake (酒) など。

私が気づいた最後のシフト<sup>5)</sup>は、長母音 [i:] が [ɪ] もしくは [ə(:)ɪ] という二重母音に変ることがある点であった。僅かな音の違いで微妙なものが多いが、旅行者の私が聞き間違ったり、別の語に聞こえたものは、かなりはっきりしたシフトと考えることができるであろう。seeの例が多かったのであげると、オーストラリア国立大学で、中年のBroad Aus E speakerと見られる男性が、See you tomorrow. といっているのは、see [sɛi, səi] you tomorrow. に聞こえ、メルボルン市内のプラットホームで若い女性がI see. といっているのは、I say. に聞こえた。またメルボルン大生と話していて、私がキャンベラに寄ってきたことをいうと、Did you see the National Art Gallery? と聞かれたが、Did you say ... と聞こえたのであった。ほかに面白い例としては、バスの切符受付係が、座席番号10-Dをten D [də:ɪ]

---

5) 本稿73頁の6つの二重母音シフトの中、[ʊu] → [ɪw, ʊɪ, ə(:)ɪ] には気づかなかった。帰国後テープで確認しても、音が微妙にしか違わないためか、それらしい例が見つからなかった。

と発音していたこと、日本に何回か行ったことがあるという年輩の男性が、新幹線や神戸、京都、姫路など地名をあげたあと「さかい」といったように聞こえたので、またどうして堺に行ったのかと思って聞いていると、どうもアルコールの「酒」のことをいっていることが、前後関係や表情からわかったのであった。これは sake を [sáki:] と発音することがあるので [sáke:i] とシフトしたものとされる。cheap がチェイブに聞こえる例もあった。

## 解釈、分析

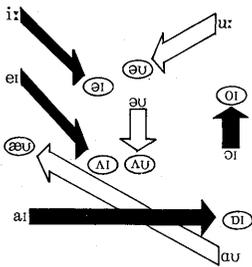
### 1. 結論

オーストラリア英語の二重母音の特徴のため、オーストラリア人以外の人には別の言葉に聞こえることがあっても、オーストラリア人の中で誤解や混乱が生じることはない。例えば、He is late. の late を [laɪt] と発音しても、He is light. の light は [lɔɪt] と発音されるので、Gen Aus speaker や Broad Aus speaker の間で誤解が生じることはない。また、そういったシフトを起こさない Cult Aus speaker も上記のような発音に接して誤解することはない。

The Macquarie Dictionary (1981年) の中で「オーストラリア英語の発音」について書いている J. R. Bernard は19頁で「オーストラリアにはただ一つの通用語 (dialect) だけがあるのであって、多様な種類に分かれても、相互に理解可能で、多分に交換し得るものである。ただ声に出しているときに、発音の方法が異なるのである」と述べている。いいかえると、音素的 (phonemically) には単一であるオーストラリア英語が、音声的 (phonetically) に3種の多様性をもって現われるということである。従って聞き手は相手がどの variety で話しているかを知って、支障なく疎通できるのである。オーストラリア人は社会的階層、言葉の話し方の面で状況に応じて、3つの variety の境界線を自由に越え、総合的に自分たちの言葉を創っている。

## 2. 二重母音シフト

資料の項で見た一連の二重母音シフトは、舌の位置で表わした母音表の中で、次の表1のように起こっている。音が重なって (merging), 会話に混乱が生じるのを防ぐためである。この表は斉藤弘子 (1986) のものである。このシフトは14-18世紀に生じた Great Vowel Shift に似た、一貫した系統的なもので、現在起こっている大変興味ある現象である。



註  
 左の図の矢印の起点も先も二重母音 (ないしは長母音) の始まりの音の位置を示している。  
 右に掲げたのは、Wells (1982, p. 256) の簡略化した図である。

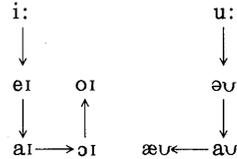


表1 豪英語の二重母音シフト

表1や資料のところにあげたシフトの中, [eɪ] → [aɪ], [aɪ] → [ɔɪ] は Broad Aus speaker と Gen Aus speaker の間に一貫して顕著に聞かれるのに対して, その他の二重母音シフトはそれほど目立たないか, 一貫して現われないように思われる。典型的なきつい Broad Aus E は, 全てのシフトを含んでいるものと思われるが, 日本人の私の耳には [ɔɪ] → [oɪ], [u:] → [ɪw, uɪ] がそれほど大きく違って聞こえないことや, [i:] → [eɪ], [u:] → [ɪw, uɪ, əʊ] は push chain の push される位置にないため, シフトしない場合も多いのではないかと思われる。

## 3. オーストラリア英語二重母音シフトの起源と発達

[eɪ] → [aɪ] を初めとするオーストラリア英語の二重母音の特徴は, 明らかに英国の英語, 特に Cockney (ロンドン方言) に起源を求めることができる。実際現在でも BBC 放送など英国人の英語に [eɪ] → [aɪ] の傾

向を聞きとることはごく普通にあることである。Wells は英国東南部に見られる二重母音シフトとオーストラリアに見られる二重母音シフトが類似していることを指摘している<sup>6)</sup>。18世紀にロンドン市民の言葉が労働者階級に特有の Cockney へと変容していったのであるが、1788年1月11隻の船が千人強の人々をオーストラリアへ運んで以来、その後19世紀に次々と移民が続いて、この Cockney をオーストラリアへ移したのであった。オーストラリアに來た移民たちは、英国では「遍在している RP (Received Pronunciation 容認発音) の抑制力から解放されて」<sup>7)</sup> 英国諸島の様々な地域や社会階層出身の人々も、新しい環境下で各自が受け継いできた言語の伝統を調整し合い、新しいものを創り出す必要<sup>8)</sup>を感じて、急速に徹底したオーストラリア英語を発達させ、定着させていったのだった。

#### 4. 二重母音シフトを種にした冗談

上の1, 2で見たように、オーストラリア英語の二重母音シフトが彼らの間に誤解や混乱を生じないといっても、Cult Aus Eがある以上、似た音が違った意味を持つことがある。例えばシドニー駅の待ち合いホールで“Darrel Smailes”という名前を老婦人4人に読んでもらったところ、2番目の語について like smile というので、彼らにとっても Smaile [smaɪl] と smile [smaɪl] (Cult Aus E) は似ているのである。variety 間の発音の相違とそのため<sup>ゆえん</sup>に生じる類似の発音を種にした joke 集がたくさん発行されている所以である。ラトロブ大学の David Bradley 博士は次のような2つの冗談を私に紹介してくれた。

- { A : I'm going to the hospital today.  
B : Are you going to the hospital to die ?!

6) Wells, *op. cit.*, Vol. 1, p. 256, Vol. 3, p. 594.

7) *Ibid.*, p. 593.

8) Ramson, W. S., *op. cit.*, p. 35.

C: What's the difference between a bison and a buffalo?

D: Well, you can't wash your hands in a buffalo.

(Dは bison を basin [bʌɪsn] と聞いたもの)

また、アメリカからシドニー大に移った Barbara Horvath 教授が教えてくれたことであるが、オーストラリアである言葉の綴りをアルファベットで伝えるときに通じにくいことがある。例えば、私の名前 NUMANO を書くか伝えるかして、相手が確認するときに [en, ju:, em, ʌɪ...] というところからは NUMI... と受け取られたのではないかと不安になる。シドニー郊外の Epping という地名の初めのアルファベットを相手が電話でいってくれるとき、[ɪ] というので、America A [ei]? と聞くと、England E [ɪ] と答えてくれるのははっきりしないで、少しやりとりが続くことになるという具合である。これと同じようなことがオーストラリア人どうしでも生じるとのことである。

#### 5. シフトの濃淡、頻度に語彙項目による差

Broad Aus E speaker はもちろん Gen Aus E speaker も、二重母音シフトが起こっている場合は、一貫してこの稿で取り上げた音に変化が生じているが、一部語彙項目による差があるようである。短い滞在であったが、they の [ɛɪ] はそのままあまり [ʌɪ] にならないように見受けられた。また I [ʌɪ] が [ɒɪ] になることも少なかった。数度耳にしたが多くないようである。

#### 結 語

今後オーストラリア英語が向かう方向について、シドニー大学のホーバス教授は次のように見ている。オーストラリアへ移り住んだ第一世代の移民は、働いている間に Broad Aus E に向かった。しかし第二世代の人々は、オーストラリア社会に受け入れられた市民になろうと望むので Broad Aus E を

避け、Gen Aus E へ移向していった。私がマコーリー大学で会った女子大生も、子供の頃母親から Broad Aus E の発音をすると訂正されたといっていた。このように Broad Aus E は縮小の方向にある。Cult Aus E もそれほど伸びない。他方 Gen Aus E speaker は自分たちの英語に自信と誇りを持ち始めている。例えば、かなり Broad Aus E の傾向のある一人のメルボルン大学の男子学生は、オーストラリア人は他の世界と違った言葉話すことによって国民としての独自性を主張しているのであって、それは自然なことだと話していた。それでオーストラリア英語の二重母音の特徴は、Broadではなく Gen Aus E のところに落ち着き、推移していくであろう。

次に国際的な視点からオーストラリア英語を見るとどうだろうか。これも米人であるホーバス女史の見方によると次のようになる。英国の RP は too snobbish (お高くとまりすぎ) として嫌われ (stigmatized), 少数派になっていくであろう。他方アメリカ英語は全世界で使われ大勢を占めている。これについて J. R. バーナードは unfair であるという。米語も英(国)語から離れていった変種だからであろう。ともかくそういった中であって、オーストラリア英語は最近注目され、研究の対象となって一つのモデルとしての地位が浮上しつつある。

オーストラリア英語の母音の特徴が、英国に発してきて、現在も共通した発音が聞かれること、英国東南部で今も home の [ou] が若い人の間で [əu] となる傾向が進行中である<sup>9)</sup>ことなどを考えると、決してオーストラリアだけの変った英語とはいえない。英国東南部の英語が標準英語となっていた歴史と、18世紀に daze の [ɛ:] が [e:] と舌の位置が上がったのは、一般大衆のふだんの話言葉 (vulgar, or at least careless, speech) の中で先に起こっていたこと<sup>10)</sup>を考えると、オーストラリア英語の特徴を変ったものとして等閑視することはできない。英語の発音の大きな変化の流れを示す

9) Gimson, A. C., *An Introduction to the Pronunciation of English*, Edward Arnold, Third Edition 1980, pp. 73, 76.

10) Wells, *op. cit.*, p. 210.

ものであるかもしれないからである。

付記。本稿は、1989年3月11日ノートルダム清心女子大学で開かれた大学英語教育学会（JACET）中国四国支部例会で口頭発表したものを補充整理したものである。

## Appendix

### SAMPLE SENTENCES

Will you please read the following sentences as you usually speak ?

- 1 They often sigh at the sight.
- 2 They often say Hello to us.
- 3 We mail letters to our son who lives hundreds of miles away.
- 4 Why does he live so many miles away ?
- 5 His grades are all A's.
- 6 He can see very well as if he is all eyes.
- 7 We've just celebrated the bicentennial.
- 8 We've just arrived at Bay-Centennial.
- 9 He lied and is laid in jail.
- 10 He laid his books on the table.
- 11 The bride had a fine braid.
- 12 The brade had funny designs.
- 13 Nay, it is nigh eight a.m.
- 14 It's already a stale style.
- 15 We like the lake.
- 16 The lake is like an ocean.
- 17 In Alaska he saw eight sleighs linked together.
- 18 Mike makes a foolish mistake.
- 19 You can't make Mike study hard.
- 20 It was his fate to fight in the war.
- 21 A whale appeared while I was on the deck.

- 22 The candidate said, "The state of Maine is mine."  
 23 Oriental boys are taught to obey their fathers.  
 24 As we grow old, we gain weight.  
 25 It is in vain to try to get fresh blood from a vein.

Reference

- Bernard, J. R. L., "Toward the Acoustic Specification of Australian English" *Zeitschrift fur Phonetik* Band 23 Heft 2/3. 1970.  
 Bernard, J. R. L., "Australian Pronunciation" in *The Macquarie Dictionary*, Macquarie Library. Pty. Ltd. 1981.  
 Bernard, J. R. L., and Delbridge, Arthur, "Introduction to Linguistics. An Australian Perspective" Prentice-Hall of Australia Pty Ltd. 1980.  
 Horvath, Barbara, "Variation in Australian English: The sociolects of Sydney" Cambridge: C. U. P. 1985.  
 Labov, William, "Sociolinguistic Patterns" Basil Blackwell. 1972.  
 Lass, Roger, "Phonology: An Introduction to Basic Concepts" Cambridge: C. U. P. 1984.  
 McCrum, Robert; Cran, William and MacNeil, Robert, "The Story of English" Elisabeth Sifton Books Viking. 1986.  
 Robertson, Stuart, "The Development of Modern English" Prentice-Hall. 1934. (Revised by Frederic G. Cassidy.)  
 Saito, Hiroko, "The Vowel Phonemes of Australian English - A Comparison with RP" 中尾啓介, 松田徳一郎, 東のぶゆき編集「竹林滋教授還暦記念論文集」研究社1986年所収。  
 Turner, G. W., ed., "Good Australian English and Good New Zealand English" Reed Education. 1972.  
 Wells, J. C., "Accents of English" Vol. 3 Beyond the British Isles. Cambridge: C. U. P. 1982.